291

特231
499

内閣書記官長 風見章閣下序文

支那事變と吾等の覺悟

始

時231
499

帝國圖書館藏

内閣書記官長　風見章閣下序文

支那事變と吾等の覺悟

事變の本質を把握せよ

東邦國策同志會

昭和十三年
帝國圖書館藏

序

今次事變は我國が儼に不擴大の方針を堅持したるにも拘らず、遂に一大事變にまで發展するに至つたのは、一に之れ自然の歸趨と謂ふの外はない。

然らば自然の歸趨とは何ぞや。今次事變の原因は一に南京政府の救ふべからざる抗日政策に在りとせられる。併し乍ら南京政府が自らの破滅を賭し怒濤を煽り出したるに由るとせられる。抗日政策が遂に自ら制禦し得ざる大衆の抗日てまでも抗日に走らざるを得なかつたのには、彼をしてそこに赴かしむるを得ざらしめた、內政並に外交的事由が存してゐたのである。唯、吾々をして謂はしむれば南京政府が是等の諸條件に對する深き洞察を缺き、之が對處を誤つたに在るのである。

吾々が茲に自然の歸趨と云ふのはこの意味である。然して一度事茲に至る。南京政權をして眞に反省せしむることが第一、その各種自然的條件の是正に努

むることが第二でなければならぬ。

然して我國の方針は飽く迄も南京政權の迷妄を打破するに在りて支那民衆を對象とせるものに非ざること、近衛首相の聲明に明かなる所であるが、南京政府の態度には毫も反省の色なきのみならず、外的條件を導入して益々紛糾を擴大せんとする傾向にさへあり、外的條件を爲す諸國中には之に乘じて東亞の禍亂を擴大せんとするものさへある。茲に今次事態の重大性がある。

更に、事態の斷截解決は我が方針を貫徹することに依つてのみ得られ、その爲めに次で累加せられ來るであらう大いなる困難を最後まで克服し拔く覺悟が必要である。而して之が覺悟は事態の正確なる認識と我が國生存の必然的動向と而して我が覺悟を徹底せしむることに依りてのみ日支兩國の眞の和親、延いて東亞永遠の平和を打開し得るとの信念を把握するに在る。

昭和十二年九月

風見章

目次

緒言……一
第一、北支那の地位……七
一、北支那概觀……七
二、北支の政治的地位……一〇
三、國際政治の變化と北支地位……一五
四、北支の經濟的地位……二一
五、北支經濟の特性……二五
第二、北支那と日本……三〇
一、北支に占める我が經濟的地位……三〇
二、政治的權益……三九
三、軍事的事由に依る特殊地位……四三

第三、南京政府の北支對策……五〇
一、南京の北支觀……五〇
二、南京の北支搾取……五四
三、南京の對北支策……五九
第四、南京政府の地位と列國……六六
一、南京政府の立場……六六
二、英國と米國……六九
三、ソ聯と南京……七三
第五、極東永久戰の構へ……七六
一、事變進展の新段階……七六
三、抗日支那の分解……七八
二、ソ聯本性を露呈す……八三
結　論……九一

支那事變と吾等の覺悟

緒　言

蘆溝橋事件は果然重大なる局面に發展した。然も之れは日本が朝野を擧げて事態の不擴大を熱望し、隱忍に隱忍を重ねたにも拘らず、支那が嵩にかゝつてのしかゝつて來た抗日挑戰の結果であることを深く銘記しなければならぬ。

我國の隱忍自重は事件後に限られたことではない。冀察政權が骨拔きになつてからも、蔣介石が我が在支武官に親日を誓つたその舌の根の皮の乾かぬ下から英國の手を提つて日本に後足で砂をかけた時にも、成都事件前後に於ける昨年の抗日事件に對しても、昨秋の日支交渉に際して屈辱的決裂を見るに至つた時にも、尙且つ隱忍して來た。正に三年に及

ぶ長い隱忍であつた。そして今次事變が突發してからも力めて現地で和平的に解決し、それを以て支那全體との國交調整の橋渡しと爲し、以て東亞安定の大願を成就しやうとして一人二人づゝ殺傷される赤子を眺めつゝ自重してゐたのである。

然るに支那は、恰も滿洲事變及びその以後に於ける兒戯に類する抵抗がずる〳〵と事態を擴大して來たやうに、忍べば押し、退けば出るといふやうにして、梅津何應欽協定は蹂躙する、冀察政權には棒を引く、北支奪還の方策は進める、昨秋の交渉では取り付く島もないまでに日本を突き放し、廣田、有田、佐藤、廣田と四代四人の外相が、日支戰ふべからず、和協親交すべしとの建前で飽く迄交渉を求めたのに對して全く馬耳東風、北支奪還の手段を着々實踐して來たのである。それ故にその結果として起つた事態に對しても何等逡巡することなく、抗戰配備をとり、前線は事態の擴大を寧ろ促す如く挑戰して來たのである。

かくして惹起された日支の全面的な一大事變が、支那にとつて、またまから間違へば東亞に取つて極めて重大な事態を招來するに至るかも知れぬことは、掌を指すよりも明白であつた。然らば何故支那はかゝる自らの破滅を招くが如き無謀なる對日挑戰に出たのであるか。

それは一に支那の救ふべからざる誤解に基くといはねばならぬ。支那は支那自身を正しく認識して居らぬ。日本を理解して居らぬ。日本と支那との關係が如何あるべきかを十分に考察して居らぬ。東亞の世界に於ける地位、列强の對支要求についてその眞實を洞察して居らぬ。

支那は幾度か列强の爲に併呑乃至は分割の危機に瀕した。列强は絶えず支那を植民地化又は併合しやうとしてゐる。特に英國とソ聯邦とは常に積極的に攻勢をとつて來た。支那は口を開けば、日本は朝鮮を奪ひ、臺灣を取り、滿洲を削つたといふ。然し、日支の現在はそんな揚足取りや小股掬ひに快を求めてゐる時ではない。日本は曾て積極的に働きかけた事がない。日本は防衛はしたが侵略したことはない。朝鮮を取つたといふが、それは日

本と支那とは全く同等の立場にあるとき、否寧ろ客觀的には支那の方が强大であるとされてゐた時に、日本がその生命線を防衛したのである。臺灣もさうだ。日清戰爭の時、どちらが客觀的に優勢であつたか。支那は世界に誇る甲鐵艦定遠、鎮遠を日本に游弋せしめ、屢々漫心して暴狀を働いたではないか。之れ全く同等の立場に立つて、小島國日本がその生命を防衛したのである。日本が强大なる武力を恃んで强奪したのではない。成程、滿洲は正に日支兩國はその國力に著るしき軒輊があり、恰も日本が强大なる武力を擁して滿洲を奪取したかに見える。然し乍ら仔細に觀察すれば時の日本は辛うじて滿洲に得て居た僅少なる利權を岌々乎として守つてゐたのだ。支那は擡頭した國民力。國民的氣勢の潮へ乘つて、武力に非ざる暴力を以て奪還せんとしたのだ。茲でも日本は隱忍又隱忍の後、遂に國民的生存をかけて支那と爭つたのである。

若し、その場合、不平等條約なるが故に暴力を以て破毀したのだとなす支那の理論が通るならば、こは明かに宣戰の布告に類するもので、我又斷々乎として之を武力排除して些かも差支へがない。その生じた結果に對して何等の責を負ふ必要がない。然るに支那は全く右の如き理由を眞實の理由とし、表面は日本の攻勢を僞裝して世界に愬へつゝ日本からその僅かに持てるものを奪還しやうとしたのだ。

日本を輕敵と見、支那を取卷く戰線下の最弱點と見て、茲から初めの凱歌を擧げやうとした所に誤ちの出發點があつた。そして今日に至るまでその誤ちを改めない所に誤ちが重ねられて來たのである。支那は日本を深く洞察しなければならぬ。今次事變の直後、北支の要人が「日本があんなに一致しやうとは思はなかつた」と洩らしたのは、今日の支那が日本を見誤つてゐることの最も適切なる例證である。支那人中には日本の歷史、近代史を研究するものも少くないやうだ彼等は徒らにマルクス主義的分析のみに足らず、よく日本の眞實、日本の力と苦鬪と正義とを把握して、大悟一番すべきである。

併し、翻つて今日の現實を見るとき、支那がその事大主義的他力本願を一擲して日本の眞實心を求めて來る時期は未だ前途遠遠である。我々は彼等をして茲に至らしめるまで徹

底的に膺懲の鐵槌を加へねばならぬ。そして彼等誤謬の根元は、近來首相も聲明された如く、支那大衆に非ずして蔣政權である。英米資本の奴隷である半封建的軍閥であり、その故にこそ自己政權の强化のために國家と國民とを犧牲に供し、日本の生存權を脅やかし日本の正義を傷け日本の歴史を汚辱しつゝある蔣政權である。

我等はこの爲めには最後まで戰ひ拔かなければならぬ。中途で腰が折れては一切は水泡に歸する。北支事變、滿洲事變、日支事變が今後に亘つて幾度となく繰返へされるであらう。我々は重なる事變のために今度こそへと〳〵に疲れないとも限らない。されば、我々は是を我々こそ「最後の關頭」を觀じて、事變意識の徹底的實現をやり通さねばならぬ。或はその爲めに日本の敗戰を喜ぶ國外の何れからか大きな横槍が出て來ないとも限らぬ。之は最惡の場合であるが、之なしとは斷じ難い。我々はこの總てに對して最後まで闘ひ拔かなければならぬ。

總てはそれからだ。

第一　北支那の地位

一　北支那概觀

今次事變は日支間の國交を全般的に且つ根本的に革正すべき、否之に依つて東亞の安定を根本的に策定すべき性質のものであるが、その焦點は北支那を日支間に於て如何に取扱ふかに在る。問題は北支に發起し北支に歸納されるのである。仍つて北支の地位、その自然的形象、その對支關係、その對日關係並にその東亞及び國際地位としての意義を解明することが先決である。

北支那と云つても、その包容する地位は時代と觀點とを異にするに從つて異つた內容を持つてゐる。例へば或る時代には揚子江以北一帶を總稱し、或る時代には河北、山東の二

省位しか意味せず、山西、綏遠は西北の觀念内に包含されてゐた。然し各時代を通觀し、政治經濟その他の理由を綜合して、大凡そ隴海鐵道以北（舊黃河以北）黃河流域以東の地域といふことが出來るであらう。之を行政區劃について言へば、河北、察哈爾、山東、山西、綏遠の五省であり、場合に依つては江蘇、安徽、河南の一部を包攝せしめるといふことになるであらう。

その面積は、

	（平方粁）
河北省	一四〇、五二六
察哈爾省	二五八、八一五
山東省	一五三、七一一
山西省	一六一、八四二
綏遠省	三〇四、〇五八
五省計	一、〇一八、九五二

で全國總面積八百二十七萬六千五百七十七平方粁（新疆を含み、外蒙を含まず）の約一割二分强である。

又人口は、

	人	（毎平方粁平均人口）
河北省	二八、四六六、五三〇	二〇三・七四
察哈爾省	一、八七六、四六一	七・二五
山東省	三七、二一四、〇八八	二四四・〇三
山西省	一一、六一〇、七七八	七一・七四
綏遠省	二、三二一、八七九	七・六四
五省計	八一、四三六、七三六	八〇・四一

で、全國では三億九千九百三十萬三千七百三十一人、毎平方粁平均人口は三十八人七六である。北支の人口は全支の約五分の一で比較的稠密であり、特に山東、河北の二省は江

蘇省（三三六人七七）に次ぐ密度を有して居る。年々河北山東兩省から樂土滿洲へ五十萬乃至百萬の移民を送つた所以でもあり、北支と滿洲とを緊密にした理由でもある。

二　北支の政治的地位

清朝三百年の治世は北京が政治の中心であつた。從つて北支は楊子江流域までも含む廣大な範圍に亘つて、南支は著るしく局限せられた寧ろ邊境的存在であつた。蓋し支那の所謂北狄たる滿洲族が北邊に起つて漢族を南征したのであるから當然であつた。ところが一九一一年十月、今度は南方から滅滿興漢の民族革命が起つて北伐し、南京を陷れ翌年一月中華民國を建てた。孫文の革命がそれで清帝は退位した。大正元年のことである。そこで支那は再び南北を二大分するとともに、封建的軍閥割據の端を發したのである。南京に大統領を名乘つた孫文は翌民國二年には早くも日本へ亡命しなければならぬことになり、袁世凱が北京で大總統となつた。六年には張勳が清帝の復辟を策して擧兵し、又その年九月には廣東政府が出來た。八年には北京政府と廣東政府とが南北和平會議を開いて成らなかつた。それから一五年（昭和元年）蔣介石の廣東派が北伐して南京に出でて國民政府を作るまでにも、安福派と直隷派、奉天派と直隷派、江蘇と浙江との爭覇が幾度か行はれ、各地各派の軍閥が入亂れて爭ふ全く亂軍の狀態を現出した。それが北方は大體張作霖に依つて南方が蔣に依つて夫々代表的勢力となつた一六、七年頃になると、北方派と南方派との大決戰が行はれ、濟南事件、日本の山東出兵等のことがあつて、事實上どちらも決定的勝利を得ないで退いた。

此の間に於ける特徴は北支が、北方派の主たる勢力たる滿洲の作霖の子張學良派と南方派の主たる勢力たる蔣の國民政府との中間に在つて半ば學良の勢力範圍であり、半ば兩派の緩衝地帶でもあり、そして北支に在つて諸軍閥が各々自己の小地盤を擁して半獨立的な自治――保境安民を稱し乍ら、それ〴〵地盤の擴張を圖つてゐたことである。例へば山西の閻錫山は山西モンロー主義を唱へつゝ山東を窺ひ青島を狙つてゐた。又山東に在つた韓

復槊は滿洲事變の直前、直隷（今の河北省）の一角に在つた石友三と聯合して反學良軍を起して東三省を少くとも長城以内を奪取しやうとしたりしてゐた。是等の動きを貫くものは勿論軍閥的制覇心理であつたが、同時に南京革命派に對しては「北支人の北支」を稱へて南方との差別觀を樹て本來の自治的姿を示してゐた。

その狀態は惡く言へば民族國家としての體を爲さず、良く見て半獨立的自治的、個々バラ〳〵な便宜的な集團でしかなかつたのである。そして、それは歴史的に支那の本然的姿であると言へる。神代は知らず、大體支那を統一したのは秦（始皇帝）であり、次にこの統一狀態を嗣いだものが漢（高祖）であつたが、秦の時代にも、漢の時代にも、燕、趙、楚、南越、吳等必ずしもその威令に服したるに非ず、諸方に叛亂絶えず、匈奴は又屢々長城を越えて京師に入るといふ風で、依然たる戰國時代であつたと言へる、三國時代も魏、晉、東晉、宋、齊、梁、隋、唐から後宋に至る間も、實は統一の完成された時代はなかつたのである。然もその間時に長城外に勢威を伸長したこともあつたが、多く今の北支那の北邊は絶えず北方族の爲めに侵寇され、統一の覇を爭つたのも黄河流域から揚子江流域に至る地方が中心であつた。そして蒙古の成吉思汗、忽必烈に北支、西部支那及び全支を征服せられた時代もあり、明の二百五十年が稍平靜であつたが、轉て再び蒙古と同じ通古斯族たる滿洲人の支配を受ける清朝となつた。あの大きな支那のことであるから、明清の五、六百年間が比較的穏やかに全支統一せられてゐたのは寧ろ驚くべき成果であるといわねばならぬ位である。蓋し今日の如く交通機關備はらず、然もロシアの如く人口稀薄ではなく、相當の人口を擁してゐたからである。然しそこには首肯される一理由があつた。それは地方分治の特殊な政治樣式であつた。宋の時代に省政を布き省の自治政治を認め省は恰も聯邦内の一國の觀を呈したのであるが、比較的無事平安な時代はこの省自治が稍滿足に行はれてゐた時代なのである、詰り、一九一一年の辛亥革命以後しば〳〵問題となつた聯省自治なるものは、それが過去に於て比較的平和な時代を形成してゐたからであつた。然しその時代の特性は中央政府の權威が儀禮的な存在であるに過ぎず、皇帝と稱し、天子と云

ふも、政治は地方民治であつた。皇帝吾に何かあらん、とはこの時代卽ち天子あれども恰も形式的存在で、民は自治、政治は寧ろ無爲の狀態であつた民鼓腹する時代の、君主の地位でもあり、民の理想でもあつた。

中央政權が眞に統治の權威を揮ふ時代は、却つて叛逆相踵ぎ勢力相爭ひ擾亂熄まず、民平和を謳歌した時代は一個乃至數個の中央政權が影を沒してその存在極めて薄く、民治大いに擧れる時であつたのだ。

そして過去の長い歷史に於ける事實を要約すると、

一、常に揚子江邊の勢力と北方勢力との爭覇の歷史であつた。

二、北方異種族の支那征服に對する、從來の漢民族の反噬であつた。

三、最も統一された時代は卽ち、東西南北各地のそれ〴〵特色を持つた各地方族がそれ〴〵の自由な生活を營んでゐた。

と云ふことである。茲に滿洲事變以前第一革命以後に於ける南北支那爭執が決して一時的の異常現象ではなくして、歷史的な必然的現象であつたことを語るものがある。

三　國際政治の變化と北支地位

以上の歷史的事實中の最大なる現象は他民族に征服せられては之を覆沒したのが支那史であつたといふことである。從つて今日列國との國際關係に依つて影響せられて往時とは全く樣相を異にしてゐるが如き支那の地位も、國際關係の權利が變つただけであつて、依然たる歷史の繰返へしであるに過ぎぬ。

卽ち異民族侵略の好餌として四千年を生き續けて來た支那は今日も尙、列國の半植民地的な市場としての好餌たる地位を一步も脫けてゐない。

然し乍ら茲に顯著なる變化を遂げた一事がある。それは世界に於ける國民國家の成立發展に伴つて、支那が從來の如き全く國境不明の漠然たる存在を續けてゐることを許さなくなつたといふ事である。然してその明白なる實證は之を邊疆諸地方の崩壞、支那から分離

して他の强國に吸收されて行きつゝある事實である。西比利亞地方の古い所は措いて、外蒙唐努烏梁海等は蒙古に征服されて蒙古を吸收し、滿洲族に征服されて滿洲を消化して了つた結果として、蒙古、滿洲族の成立地方が自然支那領たるが如き結果となつたのであるがその兩地方は現在ソヴエート聯邦の內に包含されて了つた、唐努烏梁海は表面はタンヌ・トウワ人民共和國として獨立國の形を成してゐるが、併し外蒙人民共和國とソ聯邦との間に孤立無援で介在、存立してゐる國であるからその獨立性などは到底問題にならぬ。殊にその政治組織が全くソヴエート聯邦のそれであり、ソ聯との總ての關係に依つて立つてゐる國であるから、ソ聯邦の一員と見做さざるを得ないこと勿論である。

新疆も既に省內に入り込んでゐる新式强大な武力に睨みを利かせ、總督とも云ふべきソ聯最高代表者が實際の政治を行ひ、支那は全くそこから遮斷されて了つてゐる。新疆が完全にソ聯化されたのは一九三五年頃であらう。

西藏も同樣である。英國は兩度遠征軍を印度から派遣して西藏軍を敗り、宗主權に近き權利を獲得し、次で事實上の主權者達賴喇嘛を籠絡して遂に獨立を宣言せしめ、その後の西藏は英國の尻押しで寧ろ支那側と戰爭する狀態であつた。最近支那側の勢力が首都たる拉薩に及んでゐるかの觀があるが、印度國境に近き所は實事上英領たるに等しく、達賴の死後彼に代つて西藏の支配者たるべき支那政府と良き班禪喇嘛が拉薩に入ることを得ないのも、達賴派との勢力關係であるよりも寧ろ達賴派を支援してゐる英國勢力に拒否されてゐる結果である。之より先英國はビルマを支那から奪取し、續いて雲南省片馬地方に武力侵入して之を占領した。而して他方に於ては滿洲を喪失すると同時に、江西に在つた中國共產軍を西北に追剿した結果は却つて寧夏、陝西、甘肅の西北諸地方をソ聯勢力に近づけつゝある狀態を作り出した。青海の如きは回教徒馬步芳の獨裁的勢力下に在り、半獨立的狀態にある。

以上の如く、一方に於て支那國民黨を中心とする支那の國民國家形成の運動が行はれ、孫文等の運動に次で蔣を中心とする南京政府の支那統一化運動が漸次結實せんとすると同

時に、他方に於ては、支那の統一化以前にその勢の及ばぬ邊境地帶を領有せんとする外國の運動及び、支那の國民運動自體が惹き起した外國との摩擦に依る反動的な運動とが起り、この兩者は支那の邊境諸地方を繞つて激しく爭はれたのである。そしてそれは列國間の利害の衝突と相俟つて列國相互間及びそれ等各國と支那との間の關係を二重に複雜ならしめた。英國が西藏、雲南、新疆(南部)を侵しつゝ、南京政權を支援してソ聯と不可分の共產軍討伐を行はしめ、南京は又何れは南京を呑み込むであらうソ聯の力を借りて北支に日本と爭はんとするに至つたのである。

かゝる支那國民運動と列國との摩擦の中に滿洲事變が激發せられ、北支那の地位に新たなる重大な變化が起つたのである。

張作霖の時代に東北政權が北支の支配者となつた時、一時北支は揚子江岸に達し、數個存在してゐた支那政治中心の最大のものとなつた。然して南京政權の出現に依つて、張學良が表面南京の節度に服した結果、北支も表面は問題なく見えたが、內實は、實質的にも學良及びその地盤を支配せんとする南京と、內心寧ろ南京を征服せんと意圖してゐた學良とが、爭奪の火花を散らしてゐたのであり、前段に一言した如く北支人は又それ〳〵に茲に地盤を確立せんと爭つてゐたのである。その狀は之を歷史のある時代について云へば蒙古族と漢族とが相爭つてゐた時代のそれであつた。

然るに滿洲事變はこの北支地位を一變したのである。卽ち學良の無謀なる企圖は力を以て日本の在滿權益一切を收奪しやうとした。その結果日本の强烈なる反擊に會して遂に武力的抗爭を惹起し、その間隙に、かねて軍閥學良の暴政搾取に堪えかねてゐた東北省民の獨立運動を擡頭せしめ、遂に滿洲國を出生せしめたのである。ところが新滿洲國は日本と完全なる盟邦、卽ち軍事、經濟、政治、文化凡ゆる部門に於て全く一心同體の同盟を締結した同盟國となつたのである。卽ち滿洲國は日本を同盟國とする完全なる一個の國民國家となつたのである。從來の南京の出店であるやうな顏をし乍ら異心を抱いてゐた舊東北政權とは全く別個の獨立國家が成立したのである。そしてその結果、學良軍閥の事實的支配

下にあつた北支は學良が名實ともに南京に吸收せられざるを得なくなつた爲に却つて南京の手中に收められるに至つたのであるが、察哈爾、河北の兩省は、滿洲國を通じて日本と直接々壤することゝなつたのである。

勿論、その後と雖も、學良麾下の于學忠が天津を押へ、韓復榘は半獨立の軍閥として青島を擁し、閻錫山又半獨立の狀態で山西を死守し、從つて茲北支を最後の地盤として確保しやうとする學良と韓・閻等の軍閥と、及び南京との間の內面的な北支爭奪が全く終つた譯ではなかつたが、北支一切の政治的責任が實際に南京に歸屬してゐた事實は、北支を挾んで南京と日本とが直面するといふ新なる局面を導き出したのである。之は滿洲事變が迫出した北支の重大なる政治的意義の一である。而してもう一つの重大なる意義は、かくして北支が新たに日滿兩國と國民政府支那との間に橫はる民族的邊境地帶にも等しい地位に立つに至つたといふことである。卽ち北支は尙浮游狀態に在り、それが滿洲か、支那か、その何れかにやがて凝結歸屬すべき性質のものであつて必ずしも本質的に支那に歸一すべきものであるとは言ふべからざる地位に立つに至つたといふことである。

この政治地理學的見解は、北支の經濟的地位を明かにすることに依つて一層よく諒解されるのである。

四　北支の經濟的地位

北支經濟の一般的地位を先づ次の數字によつて見やう。

(一)　主要鑛產

(イ)・石　炭

埋藏量は山西一千二百七十一億二千七百萬瓲（全國埋藏量——以下同じ——の五一・二%）、河北三十億一千萬瓲（一・二%）、山東十六億三千九百萬瓲（〇・七%）、察哈爾五億四百萬瓲（〇・二%）、綏遠四億一千七百萬瓲（〇・二%）、北支合計一千三百二十六億九千

七百萬瓲で全支合計二千四百八十二億八千七百萬瓲の五三●五%である。

又その產額は、河北七百二十萬瓲（全國總產出量の——以下同じ——二六●一%）、山東二百六十六萬瓲（九●七%）、山西二百四十二萬瓲（八●九%）、察哈爾十萬%（〇●四%）、綏遠九萬瓲（〇●三%）、北支合計一千二百四十八萬瓲で全國總產額二千七百五十七萬瓩の四五●三%である。

（ロ）鐵　鑛

埋藏量は河北三千九百二十萬瓲（全國總埋藏量の——以下同じ——一〇●三%）察哈爾九千一百六十五萬瓲（二四●〇%）、山西三千萬瓲（七●九%）、山東千四百三十萬瓲（三●七%）、北支合計一億七千五百十五萬瓲で、全支の三億八千一百五十八萬瓲に對し四五●九%に當る。

（ハ）鹽

近代化學工業の原料として不可缺なる鹽の產額は、河北（長蘆鹽）三百八十二萬擔（全國總產額の——以下同じ——九●二四%）、山東五百三萬擔（一二●一八%）、察哈爾一百七十三萬擔（四●一九%）、山西、綏遠ともに十九萬擔（〇●〇五%）、北支合計一千九十六萬擔で全支四千一百二十九萬擔の二五●七一%である。

（二）農　業

農產物中主として中南支の物產たる米を除いた主要食糧品に於ても北支は極めて重要な地位を占める。

（イ）農民人口

山東三千七十八萬人、河北二千九十六萬人、山西九百七十五萬人、察哈爾百六十萬人綏遠百二十九萬人、北支合計五千四百六十三萬人で、全支二億九千六百八十四萬人の一八%に當る。

（ロ）小　麥

山東六千八百三十二萬擔、河北三千五百九十九萬擔、山西二千三百二十三萬擔、綏遠

約四百萬擔、察哈爾二百十六萬擔、北支合計約一億三千三百七十萬擔で全支の約三〇%である。

（ハ）大　麥

山東四百三十一萬擔、河北三百十九萬擔、山西二百二十萬擔、綏遠百三十萬擔、察哈爾九十萬擔、北支合計一千一百九十萬擔で全支の約一二%である。

（ニ）高　粱

山東二千五百萬擔、河北二千三百九十萬擔、山西一千一百二十萬擔、綏遠三百七十萬擔、察哈爾三百十萬擔、北支合計六千七百九十萬擔で全支の約五〇%である。

（ホ）その他

落花生は全支の三七%、粟は六三%、玉蜀黍は三七%、黍は五六%である。

（三）工　業

最も主要なものは綿紡績であるが、全國總錘數の約一八%が北支に在り、中山東一〇%河北六%、山西二%である。製粉業は資本、生產額とも全支の三分の一を占め、セメント工業も北支が主要部分を占めてゐる。

（四）貿易、財政

北支六港卽ち青島、天津、秦皇島、龍口、煙台、威海衞の貿易額は全支の二一%、輸出については二八%、輸入は一六%に當り、青島以外は何れも出超港である。又財政については中央稅收及び地方收入ともに全國の二〇%以上を占めてゐる。

五　北支經濟の特性

北支の經濟的地位は前表の如く全支に對して重要な地位を占めて居り、支那が之を重視するのは當然であるが、然し唯それだけの故を以て、北支の地位を決し去ることは出來ない。北支の經濟的地位について考慮を要すべき第一の點は、北支の經濟自體が自然的には

中南支から徐ろに離反しつゝあつたといふことである。

例へば生活必需品たる米、小麥、小麥粉について見ると、米は一九一二年以來輸入超過で、その入超額は一九一二年には二百六十六萬三千擔、一九二三年には二百三十七萬擔、最高の一九二九年には一千八十二萬擔であつた。又小麥は一九一二年百三十七萬四千擔の出超であつたが、一九二三年には百九十五萬擔の入超となり、一九二九年には五百六十七萬擔の入超となつた。小麥粉も同樣經過を取つた。然るに、青島及び天津の米の移入狀況を見ると反對に減少してゐる。

	一九二八年	一九三一年
天　津	八九〇、七九三擔	三二〇、八一四擔
青　島	八七、一〇三擔	九四、七七七擔

（青島一九三一年から滿洲米の輸入二四・九五五擔を除けば之亦減退である）。

卽ち生存基本資料たる米は中南支に依存するよりも寧ろ外國米、卽ち濠洲、ヴェネヅエラ、日本、滿洲國、暹羅、英領印度への依存性を增大しつゝある樣である。小麥、小麥粉についても同樣で、米國、日本、濠洲、滿洲國等に次第に依存しつゝあるものである。殊にその原因を見ると、その第一は支那農村經濟の崩壞であるが、打續く戰亂と天災とに對して、中央政府は何等の對策を講ぜず、依然として雜軍整理の軍閥的傾向を改めないことは、農村疲弊を一層甚だしからしめた。その二は運輸交通の不便且つ高價で、米國のタコマ洲から小麥を汽車と船で上海へ、さうして青島へ持つて來る方が、陝西省の渭水方面から原料小麥を仕入れるよりも安くて上等だといふことである。その三はかくして外國品を輸入する結果、支那の生產を一層混亂せしめると共に買辨貿易を活潑ならしめ、更に輸入に拍車をかけるといふことになるのである。

而してかゝる事實は加工品たる生金巾、細木綿、綿絲等についてもあることであり、時に內地製品の活躍を見る場合には、それは外國投資企業が發展した結果である。前記の鑛產の如きも中南支が北支に依存しつゝある事實を見るが、それは北支自體への依存ではな

くして實は在北支外國勢力への依存を意味するに過ぎない。卽ち之を要するに、北支の中南支依存中南支の北支依存は自然に薄れつゝあつたといふことが出來るのである。

次にその民族的關係を見ると、從來北支民族は何れかと言へば蒙古族、滿洲族等のツングース系と次第に混血し、南支が猫、猺及び安南、印度等の諸種族と混血し、その民族特性を漸次異にするに至つたばかりでなく、特に北支と滿洲との民族關係は、北支を中南支から離斷して滿洲國と緊密な不可分關係を形成せんとする狀況に在るのである。

例へば滿洲國三千萬民中の約八割は北支人卽ち山東、河北を主とする北支人である。彼等は年に數十萬に達する期節移民となつて北支から滿洲へ出稼に行き、更に年に數十萬は土着移民として北支から滿洲へ輸入した。これ等の巨大な移民と鄕土との經濟關係は河北山東兩省の民族資本にも緊密な紐帶を作りつゝあつた。

要之、北支が政治的に滿洲國及び日本と、南支政權たる國民政府の支那との間に介在して一種の邊境地帶的存在であり、その故にソヴェート聯邦も亦茲を窺つてゐるのであるがそれと同時に經濟的にも北支は、滿洲國及び日本と國民政府支那との間に介在して驢て明確にその歸屬を決すべき地位に在つたのである。而して日支の抗爭はその點を爭つたのが根本の原因であると言ふべきで、然らば日本は北支と如何なる關係に立たんとし、それを國民政府と如何に調和せんとし、支那國民政府は之に對して如何なる見解と對策とを採つたか。日滿兩國と北支との全的關係、北支と國民政府、北支に對する列國の動向、等に就て之を解明し、然る後その結論を述べ樣と思ふ。

第二　北支那と日本

我國と北支との本質的な關係は上記の如くであるが、現實の關係、特に滿洲事變以後に於けるそれは更に一層切實なるものがある。現實の關係とは、北支を挾む日支の經濟的、法律的關係と日滿支三國を繞る國際情勢の釀し出してゐる關係とである。

以下項を分けてそれを明かにしやう。

一　北支に占める我が經濟的地位

日本が熱河肅正の終りに支那軍の無益の挑戰を强壓する爲め一度北支に進出した際、英米の諸國は、日本は北支にまで來るか、と云つてざわめいた事があつた。蓋し彼等がその北支に有する權益を失ふことを恐れたと共に、彼等の有する利權、貿易上の利益を以てそこに彼等の優越性を感じてゐたからであつた。併し、北支に於ける列國の地位は、單に經濟からのみ見ても日本は遙かに優越である。

先づ貿易關係について見る。

一例として天津貿易を見ると左表の如くである。（單位百萬元）

（イ）輸出

	日本		米國		英國		獨逸		其他		合計	
	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
一九三五年	二二・三五	二三・〇五	三六・三五	三九・八八	一〇・三三	八・〇	八・七九	一三・〇	一〇・〇一	九一・二	一〇〇・〇〇
一九三六年	三一・二	二六・五〇	四四・二	三七・三九	一〇・三五	八・八一	一〇・九	九・三〇	二一・二	一二・八	一〇〇・〇〇

（ロ）輸入

	日本		米國		英國		獨逸		其他		合計	
	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
一九三五年	三三・三	四一・七〇	一二・〇	一四・二〇	九・四	一一・〇八	一〇・〇	一三・二	一七・七	一九・八一	八三・二	一〇〇・〇〇
一九三六年	二七・八	三六・三三	八・八	一二・二二	六・四	八・八三	一一・四	一五・七九	一八・二	二四・八一	七二・六	一〇〇・〇〇

右の如く、輸出に於ては日本第二位であるが輸入に於ては斷然第一位である。若し右輸入中に所謂冀東の特殊貿易を加算するときは三五年度八百萬元、三六年七千六百萬元として日本からの輸入は三五年度に於て總額の四六●七一%、三六年度に於ては實に六七●二三%を占めるのである。然もかゝる傾向は青島その他の北支六港に於ても略同樣である。

次にその品種を見ると、輸入に於いては纖維工業品、金屬製品、化學工業品、一般雜貨等の製造加工品を主とし、輸出に於ては鐵、石炭、鹽、棉花、羊毛、煙草等の原料品及び羊製品が多く、是等の種別を一瞥しても、その對日依存性並に日滿支一體の傾向が强く感じられる。次に北支が不可缺とする重要品目十種に就いて貿易國の順位を示せば左表の如くで、此の事實を裏書きしてゐる。

（イ）北支重要輸入品別順位表

品種	第一位	第二位
一 總製品	日本	英國
二 砂糖	日本	香港
三 鐵及同製品	日本	英國
四 機械工具	日本	獨逸
五 車輛船舶	日本	獨逸
六 穀粉	日本	米國
七 棉花	米國	印度
八 穀類 小麥	滿洲	ペネグエラ
八 穀類 米	香港	日本
九 油類	蘭領印度	日本
十 毛製品	英國	日本

然して是等十種目に就てそれ〴〵の國の輸出總額を國別にして見れば左の如き順位である。

（ロ）北支重要輸入品輸出國々別順位表

品種	第一位	第二位	第三位	第四位
綿製品	日本	英國	佛國	
棉花	米國	英國	支那	
毛製品	英國	獨逸	佛國	
鐵及同製品	米國	獨逸	佛國	白耳義
機械工具	米國	獨逸	英國	
車輛船舶	米國	英國	佛國	
穀類 小麥	米國	蘇聯	加奈陀	濠洲
穀類 小麥粉	米國			
穀類 米	英領印度	緬甸	暹羅	
砂糖	玖瑪	英領印度	蘭領印度	
油類	米國	蘇聯	波斯	

以上二表は一九三四年度におけるものであるが、第二表に於ける日本は綿製品が英國を凌駕して第一位に登つた以外は第四位國にも上つて來てゐない。然も北支はその大部分をその日本に仰ぎ日本に依存してゐるのである。是等の重要製品及び半製品が他の追隨を許さぬ商品的條件を備へてゐることにも依るが、他の單なる仲介品と共に、日本と北支との地理的關係及び日本が北支に有する有形無形の地盤に依るのである。茲に日本の北支貿易に於ける斷然たる優越性があるのである。

次に我國の對北支投資を見ると略左の如くである。（單位百萬圓）

北支に於ける日本の投資額は十一億五千五百萬圓に上つてゐるがその內譯は、

（イ）借款　七億三千萬圓

（ロ）投資　四億二千五百萬圓

となつてゐる。

之を列國と對比する爲めには據るべき資料がないが列國の對支投資額から上海、香港を除いたものを比較すると略左の如くで、勢力の概況を窺ふことが出來る。（單位百萬圓）

英　國	二八四（英對支投資額の一四・一％）	
日　本	二一七（日本右同　三五・六％）	
米　國	一〇一（米國右同　三三・七％）	

以上の數字に依つて北支に於ける投資關係を推することが出來るが、英國は額に於て日本を凌駕してゐるが英國の其他中には廣東、廣西及び西南邊境に於けるものを含むが故に北支に於けるものは大體日本と同額としても、英國が全對支投資の一割四分に過ぎないに反して、日本は三割五分餘に上つてゐる。北支が英國よりも日本に取つて重要なる理である。

然るに北支と日本とが更に緊密なる經濟關係に入らんとしてゐることを立證する有力なる資料がある。それは棉と鹽とである。

先づ棉に就て云へば、棉は日本內地には殆んど產出せず、朝鮮に於て繰綿として、約八千萬斤を產するのみであるから、我が需要十二億斤の殆んど總てを輸入に俟つ譯である。

昭和十一年度の輸入高は十五億二千萬斤で內印棉六億七千萬斤、米棉五億九千萬斤であつた。然るに北支は廣大なる棉作地である。卽ち、

	北支五省		その他支那六省	
	一九三三年	一九三四年	一九三三年	一九三四年
面積	一八、六〇六、八四一畝	三三、九〇〇、六四畝	三、九四七、一八一畝	三、〇七〇、九〇畝
產額	四、七七九、三四一擔	五、七六、五〇擔	四、九四四、八六〇擔	五、四〇三、四一九擔

滿洲事變後日本紡績業は北支に進出し、特に、鐘紡の如きは極めて活潑なる活動を示した。然して紡績工場のみならず棉作にも乘り出し對印度關係から印棉に代るものを茲に求めんとして棉作の大增產を計畫し、支那又之に對抗して周作民を首班とする資本團を以て棉作增產に手を着けんとしてゐた。然し、その邦人たると支那人たるとを問はず、支那での一大棉作地たる北支が棉作を增產すれば、必然にそれは日本に依存せざるを得なくなることは上記日本の棉花需要を見て明かなるばかりでなく左記、在支紡績が日本壓倒的に侵

勢なる事實を見れば全く不可避なる所である。」

全支紡績現勢とその擴張計畫

	現有設備 紡錘(千錘)	現有設備 機械(千臺)	擴張計畫後 紡錘(千錘)	擴張計畫後 機械(千臺)
天津合計	二六四	二・二	一、四一七	三二・一
邦人紡	二〇〇	一・五	一、三二一	三〇・三
支人紡	六四	〇・七	九六	一・八
青島合計	五六八	九・二	八九四	一七・二
邦人紡	五二〇	八・八	八四六	一六・八
支人紡	四八	〇・四	四八	〇・四
上海合計	二、六三九	二九・八	二、八四一	三四・二
邦人紡	一、三二八	一七・三	一、四八九	二一・三
支人紡	一、〇八四	八・五	一、一二五	八・七

次は鹽である。支那では鹽は元來輸出禁止品であるが、山東協定に依つて大正十二年より向ふ十五箇年間最高年三億五千萬斤、最低一億斤の青島鹽日本輸出の特權を得てゐた。而して昭和十年度は九萬一千瓲卽ち總輸入額の九%を輸入した。我國は鹽輸入の過半をアフリカに求めてゐる。故に北支の產鹽が多く輸入されることは甚だ望ましいし、北支も產鹽が必然に日本を顧客とせねばならぬ。滿洲事變後、我國は此の趣旨の下に、昨年三月冀察政務委員會と對日專賣契約を結び、察哈爾、綏遠等の湖鹽卽ち長蘆鹽を輸入し始めたのである。更に一昨年夏設立された興中公司の北支に於ける經濟的飛躍は日本と北支の緊密化、日本の北支依存と北支の日本依存とを併せて强化するものであつて、以上の如き關係は、列國の對北支關係とは截然區別せらるべき特殊的なものである。

二　政治的權益

日本が北支に有する政治的權益及び政治的協定に基く經濟的權益は尠くない。左に之を列擧して見やう。

（一）租　界

天津日本租界及び北平の公使館區域。

（二）領事館

天津、青島、濟南の總領事館、芝罘の領事館。

（三）駐兵權

天津、黄村、楊村、北平、郎房、塘沽、軍糧城、秦皇島、昌黎、唐山、灤州、山海關芦台。

（四）山東不割讓

大正四年の日支取極（二十一ヶ條々約）で山東不割讓を約したが、華府會議の結果之を削除し支那は別個の交換公文で聲明をした。その要旨は、「支那政府は山東省若くは沿海一帶の地、若くは島嶼を何等の名義を以てするに拘らず、外國に租借又は讓與することなかるべし」といふのである。

（五）山東省内諸都市の開放

支那では開埠地の外、外國人の居住を許さぬが山東協約で諸都市の開放を約した。豫定地は高密、坊子、綏縣、青州、長店、博山、溜川、周村の八ヶ所である。支那側は今日まで開埠を公表してないが、現實には邦人多數が居住してゐる。

（六）膠濟鐵道

膠濟鐵道は青島濟南間幹線及び三つの支線合計延長二七七哩、日獨戰の結果我手に歸し後華府會議で支那に還付した。その際鐵道の見積價格を要償し、支那は國庫證券を交附した實質上の借款鐵道である。

（七）魯大公司

膠濟鐵道沿線の溜川、坊子兩炭鑛及び金嶺鎮の鐵鑛山開發の日支合辨會社である。金

嶺鎭鐵山は豐富且つ良質であるが目下休業中である。鐵鑛需要の旺盛なる今日、時局の安定と共に當然開發さるべきものである。坊子炭は年額約十萬噸、溜川は最も有望である。

（八）屠殺場及電燈會社

日支合辨の兩事業中、屠殺場は最近一日牛九百頭、羊八十頭を屠殺してゐる。日本人檢査官が立會檢査をしてゐる。

又電燈會社は現在發電機四基、七千馬力、一年の發電量二千七百萬キロワットに上つてゐる。

（九）山東實業借款

大正七年の山東二鐵道借款前貸金二十萬圓。大正六年貸付け昭和九年改訂の中日實業株式會社の元利計六百五十萬圓。

（十）その他

前記支那鹽輸出特權、土地建物等の不動產、二百萬坪の借地權、稅關と日本人間との日本語使用權等。

三　軍事的事由に依る特殊地位

北支と滿洲國とが既述の如き關係にありとすれば、軍事的にも一體觀があるべきであつた。然るに支那政府の政治的考慮は全く逆の關係を創り出し茲に二つの軍事的考慮を促すに至つた。

その一は支那の日滿兩國に對する抗爭反擊的方針であり、その二はソ聯の極東政策であつた。滿洲にある日本の權益一切を收奪して日本を大陸から追拂はうとした結果滿洲事變を起し、却つて滿洲國が獨立して自ら滿洲を喪つた張學良としては、一度南京へ身賣りをした以上今更遽かに妥協もならぬ立場に在つた。又南京政府としては、その中に學良を打倒し滿洲までも實質的に自己政權內に包括しやうといふ下心で滿洲事變前學良を使嗾して

ゐたのであるから、學良の滿洲喪失には己れ自らも半ば責任を負はねばならぬ立場であつたが、然し同時に學良が失敗したことは、彼と共に天下を二分してゐる形（實質上）であつた南京としては寧ろ勿輕の幸であつた。蓋し學良東北政權の實力たる東北軍數十萬を此の機會に滅亡させてその一大敵國を解消しやうとする意圖あるが故であつた。

かうした學良と南京との複雜な立場からの合流は、學良をして穩やかに北支の地盤を固守せしめなかつたのである。卽ち南京は北支に小さく無事を圖らうとする學良をして、東三省喪失の責任を責めて已むなく無効有害なる對日抗爭を續けさせたのである。此の時に於て南京が卒然としてアジアに於ける平和の根元がどこにあるかを感得し得たなら、その時以後日本と支那は和親協力東亞の安定に眼覺ましき成果を擧げてゐたであらう。長き歷史と時の勢ひと支那必然の運命であつたとは云へ、日本にとつても、支那にとつても惜しまれる機會であつた。支那は統一卽ち南京政府の强化と抗日とを二つの不可分のスローガンとして、茲に全支の運命をかける抗日武力戰、滿洲奪還を開始したのである。當時表向きには今日の如く明白に呼號はしてゐなかつたが、藍衣社の第一回、並に第二回政策討論會に於ては明かに武力抗日、滿洲奪還、その爲めの不斷の抗日を決定してゐたのである。長城線に對する武力挑戰は身の程知らぬ彼等のかゝる方針から出た執拗なる企圖であつた

滿洲は獨立間もなく、且つ國內に彼等南京と通謀する幾多の敗殘兵匪あり、その治安維持上北支との境界に確固たる防禦線を設定する必要を生じたのである。まだ列國の支援を期待し、北支へでも引き出したら英米等諸國の强大なる武力が沛然として日本の上に來るであらうかを望んで、長城線に挑戰し日本軍を北平の近くにおびき出したのである。然るに列國は動かなかつた。日本は兵を駐めて北平へ進まなかつた。かくして彼等の反間苦肉策は茲に失敗し、遂に諦めて協定を締結した。是れ塘沽協定たる北支停戰協定である。土肥原秦德純協定は、最早日本引出し策は棄てたが最後まで決して望みを棄てぬ彼等の民族性、或は抗日に依つて利益を得る類の人種等の策動等が重つて察哈爾から熱河を窺つた結果、塘沽協定と同一趣旨の下に出來たものであり、梅津●何應欽協定は又、何等が策動を

停止しなかつた爲め、遂にその煩瑣と危險とに堪えずして斷乎支那の反省を促した結果出來た同趣旨の協定である。茲に明かな一事は、彼等が卽座にその將來を洞見し、無益なる抵抗を停止してゐたなら、北支も察北も今日の如くではなかつたらうことである。

ソ聯の東方政策は帝政時代からの傳統である。吾々は旣に帝政ロシアの極東進出に對して日露戰爭で戰つたのである。然るにソ聯の東方進出、極東經略及び支那に對する壓迫は到底帝政のそれの比ではない。

ソ聯が經濟的に東部ロシアに次第に依存する傾向に在ることはソ聯內外の學者の認める所である。ソ聯が第二次五ヶ年計畫を東方に指向したのは全く必死の行動であつたのである。それは重要資源の多くがその七、八割を東部ロシアに包藏してゐる事實が明證する所である。然も一國社會主義を樹立して取り合へず國內鞏化を圖つてゐる現在のソ聯が如何に極東資源の開發に熱中してゐるか。それは慥かに、彼等が言ふ樣に、東方發展こそソ聯の全面的發展であり、東方を開發することに依つてソ聯社會主義國家が經濟的獨立を確保することが出來るのである。然も、ソ聯は初めから世界赤化——資本主義國の武力的打倒を策して武力强化に邁進してゐた。一九二八年から開始された五年計畫は經濟獨立と武力强化の二途一目的を達成しやうが爲めのものに外ならなかつた。そこへ滿洲事變が起つた爲めに彼は俄然滿洲國境の武力を强化した。その强化の跡は茲に贅言するまでもなく周知のことである。茲に蒙古及び北支の軍事的地位の大きな變換が起つたのである。

更にそこには日滿兩國とソ聯との間にもう一つの重大なる關係が在る。それはソ聯東方政策の他の一面、世界赤化の爲めの大いなる補强工作としての對支赤化の問題である。レーニンが「世界赤化は東方に於て決す」と云つた言葉は、支那、朝鮮、印度等の東方諸民族を赤化し、是等をソ聯邦の翼內に領有し、それに依つて西歐資本主義國を打倒すべき勢力の補給基地を得やうとしたのである。それを得ると否とが世界革命を成就させることが出來るか否かの鍵であるとしたのである。東方諸民族の赤化といふ目的の外に、それこそ西歐を赤化するための唯一絕對の保障工作だとしたのである。支那四億印度一億の人員資

源と支那印度の物的資源――それは單に戰用資材ばかりでなく、共產主義國ソ聯の經濟的社會的、國家的存立を支援する植民地としての――は共產主義ソ聯にとつて絕對須要のものである。極東シベリアは一國社會主義を守る爲めには十分であるが、世界赤化の爲めには十分ではない。スターリンは一國社會主義を主張し、世界赤化をやめた、と云つてゐるが、それは邊周資本主義國の强化が、たゞ現實に世界赤化を不可能ならしめてゐるに過ぎない。已むなく鋒先を止めてゐるに過ぎない。隙あらば乘り出して來ることは火を睹るよりも瞭かである。

從つて彼は支那に對する工作は瞬時も怠つて居なかつた。中國共產黨の創設、その援助國民黨に對する支援は之であつた。その爲めソ聯と國民黨卽ち南京政權とは中國共產黨を介して、或は合作し或は分離した。さうしてその間合作すればソ支聯合の危險が滿洲に迫り、分離すればしたで、中央に追はれた中國共產黨の危險が北支から延いて滿洲を脅やかした。

かくして、ソ聯の東方進出は滿洲に對して直接の脅威を示すと共に支那をも介して滿洲に間接の脅威を及し、日滿兩國に取つて二重の危險を感ぜしめたのである。北方及び東方からは直接に、西北からは外蒙を通じ、西方からは新疆、支那西北地方を通じ、南方からは南京政府の勢力として迫つて來たのである。之を軍事的に見る時はソ聯、中國共產軍、支那軍が滿洲及び日本を三方から包圍するの態勢に在るのである。この場合に於ける蒙古と北支の軍事的地位は、滿洲防衛の前進陣地として、ソ支兩者の連合を或る點まで離斷し滿洲國をソ聯より護る爲めの側防的位地として重要なる戰略的意義を有することゝなつたのであるが、これ日滿兩國と支那との間に新に生じた軍事的地位の變化である。

第三　南京政府の北支對策

一　南京の北支觀

南京政府の對北支觀は傍眼もふらず「我が領土なり」とする觀念に固着してゐた。それは素朴なる國民意識の本能的な動きであつた。枯木も山の賑ひ程度の力で歐洲大戰に參戰したのが民族的覺醒の出發であつた。苦力を歐洲へ送つて荷役に從事したのが參戰の最大の功績であつた支那は、その後の平和會議では日本軍と共に獨逸と戰つた樣な顏をして功績を誇つた。蓋でも摑まうとした英、佛等の聯合諸國が唯獨逸に勝たんが爲めの一心から支那にチヤホヤしたのが抑々の始まりであつた。未だ嘗つて國際的に人間並に扱はれた事のなかつた支那が、有頂天になつたのは當然であつた。そこへウイルソンの民族主義、民族自決主義の提唱と、ボルシエヴイズムの民族解放論とが、有頂天になつた支那の國民意識に拍車をかけた。ウイルソンの民族自裁主義が、英・佛・伊等の獨逸領土割取の約束に加はらなかつた故に之を排擊せんとする政策であつたことは今更ら說くまでもなく顯著な事實であつた。之は歐洲に於ける古き紛爭の禍根を除いて新なる禍根を作つたものであつた。ボルシエヴイズムのそれは、民族を資本主義諸國の植民地たる地位から解放してソ聯共產主義國の桎梏下に置かんとしたもので、共にそれ〴〵の立場からの政策であつた。

之に搖ぐられて遽かに國民意識を興隆せしめた支那が、今迄列國から半開植民地國と同樣に取扱はれ、國內の歷史は又封建的分裂狀態を續けて來たその反動として、小兒病的に國民熱に浮かされたのは或は已むを得なかつたかも知れぬ。けれども四千年の惡夢を醒ます爲めには正確なる歷史觀、時代觀に基く嚴肅な自己批判が先づ必要であつたが、熱病患者となつた支那には到底その餘裕がなかつた。國民的覺醒は附け燒刃たるを免かれなかつ

た。それが依然たる封建的軍閥意識と結びついて過去二十年に亙る國內紛爭と對外葛藤とを導き出したのである。それが眞の國民的覺醒に達すべき不可避の過程であるならば、遲くも滿洲事變で反省しなければならなかつた。支那の歷史に對する自己批判、時代——國際環境と自己の地位に對する正確なる認識に到達しなければならなかつた。特に利害の最も切實緊密なる隣邦、卽ち日本とソ聯との關係に就てその眞實を把握する所がなければならなかつた。

歐洲大戰は何が故に起つたか。大戰後の世界不安は何が原因であるか。何が再び大戰を豫想せしめてゐるか。我無者羅な國民主義が大戰前の資本主義的競爭と何等擇ぶ所がないことを知らねばならなかつた。大戰後に起つた國際協調主義はもつと現實に、國民の經濟生活に對して國境を開放しなければならなかつた。世界の經濟生活は國境を越えた自由であることを求めてゐた。凡ての人類の有無相通ぜしめることを要求してゐた。國民經濟は世界經濟へ飛躍してゐた。人類の經濟的活動は人類が到達すべき自然の方向へ進んでゐたのである。持てる國の國境意識だけが之を阻んでゐたのである。

日本は然し、國際場裡に於いて決してこの國境意識の突破を試みたものではなかつた。民族解放理論に押されて寧ろ後退しつゝあつた。そうして持ち過ぎてゐる英、米等の諸國が更にその上にも支那市場から日本を追ひ退けて之を持たんとして、民族理論で支那の後押しをしたのである。その結果、支那は日本を國際戰線に於ける弱點として衝いて來た。日本が唯一の辛うじて保持して來た、然も日露戰爭で戰つた果てに得た貴重なる滿鐵すらも無條件で取り上げやうとしたのである。支那が統一と國權の恢復とを圖らうとしたのは首肯も出來るが、然し歷史と時代とを無視して、日本を徒らに墮落さうとした所に致命的な過誤があつたのである。

滿洲事變の結果はそれを立證したのである。皇道の理想と王道の理想と、それは唯有無を相通ぜしめやうとしたものに過ぎない。日本は支那を隷屬せしめやうとするのではない。共存の最高原理を實現せんことを求めてゐるに過ぎない。然るに支那は、日本の興亡をか

けた必死の行動を、歐米流の侵略で片付けやうとした。それは歐米が支那を此の上にも持たうとする爲めの伏線である。それを目前の利害、眼先の便宜の爲めに利用した。自己僞瞞は日本ではなくして支那自身であつたのだ。

かくして支那はこの過誤を再び三度び茲に繰返へさうとしてゐるのが、滿洲事變後に於ける支那の對日政策であり、對北支政策、對滿洲政策である。支那は北支の新なる地位を認識することが出來ない。滿洲を取り戻さうとする意識のみに支配されて、その結果北支の地位が益々日本と滿洲とに重大さを加へて行く事實に氣が付かない。支那が日本を、滿洲を脅威しなければ、北支は日支共存の爲めの絶好の交易場であり交驩場である。然るに支那は北支を我物なりとする主張を無茶苦茶に押通さうとして來た。南京政府北支對策の根本思想は、スタートを誤り從つて誤つたコースに踏み込んだまゝのそれである。

二　南京の北支搾取

南京政府と北支との關係は前二項に概記した事情を條件として主權關係に在る。だから南京が北支を支配しやうとすることはその限りに於て當然であるが支配方法が反日的であり抗日的である時は日本の反擊に會することになるのも當然である。昭和十年秋末頃から起つた北支自治運動の如きは、その間に於ける日支關係を端的に表示するものである。

北支と中南支との經濟關係はその一端を前に記したが、北支五省最近の貿易關係を見るに、最近九ヶ年間の外國貿易平均は輸入二億二千四百萬元、輸出は一億八千七百萬元、合計約四億一千一百萬元であるが、國內移出入は最近二ヶ年平均で移入一億九千四百萬元、移出は一億六千一百萬元合計三億五千五百萬元で、外國貿易は五割四分、國內貿易四割六分の關係である。更に密輸出入、邊境貿易、對滿陸地貿易を加算する時は外國貿易に遙かに多額となる。又、山東、河北兩省の滿洲移民に依る關係を見ると、彼等は一年で二五元乃至三五元を持歸り、或は送金し、三年以上の在滿者は年百元を送金するといふことである。而して是等移民の數を月約三十萬人とすれば年約一千萬元の送金がある。之は河北山

東の零細民を賑はすに役立つものであるが、彼等は中南支へは出稼ぎに出ない。中南支は逆に政府の名に於て北支を搾取してゐるのだ。

例へば南京が北支に於て收納する收入と北支に對する支出とを比較すると左の如くである。

（イ）北支に於ける中央の税及税外收入

關税	七、〇〇〇萬元
鹽税	三、三五〇
統税	一、五一〇
菸酒税	三六〇
印花税	三九〇
鑛税	二〇〇
交易所得新税其他	一〇〇
税外收入	一、〇〇〇
合計總額	一四、〇〇〇

（ロ）北支に於ける中央支出額

一般行政費	二、二二〇萬元
徹祕費	一、二八〇
軍事費	三、一五〇
外債負擔額	一、七〇〇
內譯 關税	一、四〇〇
內譯 鹽税	三〇〇
合計總額	八、三五〇

卽ち此差引五、六五〇萬元が中央政府の毎年北支より收奪する額である。

中央は、國內統一、軍事統一を目的として北支に於ける總ての權限を中央に收納しやう

とする。然しそれは普通の國家に於ける中央統制とは些か趣を異にする。蓋し屢記の如く北支は民族的にも中南支と異り、北支人の北支を標榜し、希望し中央大軍閥の搾取を欲せず、北支の地方自治をこそ願つてゐる。從つて中央の北支收納工作は一面に於ては國家の近代化の傾向を示すと同時に他面に於ては恰も邊境異民族併合と同一の形體を取る。所謂雜軍整理と稱するものゝ中に、之を改編するに及ずして之を殺戮する方法を取りつゝあるのはそれであつて、日本軍に依る第廿九軍の整理の如きはその好例である。かやうにして中央と地方との關係は一面に於ては相手を亡す機會を求めてゐる。寧ろ敵對關係に在るが故に、その經濟關係の如きも普通の國內意識を以て一率に見ることは出來ぬ。否、寧ろ之を一の變態的な抗爭王侯の關係に於て見ることの方が正しい。山西の閻錫山の運命も、山東の韓復榘の運命も廿九軍の運命と同じ軌道に在る。從つて現在に於ける北支は全く南京政府の植民地であり、やがて南京政權內に併呑されんとしつゝある一邊境自治種族であると云へるのである。

三　南京の對北支策

北支が滿洲國に反噬したのは北支の意志ではなかつた。北支の諸勢力を一時抑へてゐた張學良が中央に投降した關係から中央南京の實力が北支をして反滿行動を執らしめたのである。蓋し北支の新地位が必然に滿洲國に接近すべき運命に在つたことが南京の最も恐れた所であつたからだ。そこで北支諸軍の中に中央軍並に各種中央機關を設置して一方抗日反滿行動を繼續せしめると共に、その間隙に乘じて一擧に北支を中央化しやうとしたのである。

然し反滿抗日の戰爭行動及び暴行事件は結局、塘沽停戰協定、梅津●何應欽協定、土肥原秦德純協定を導き出し、却つて日滿兩國と北支との近接を促すに至つた。例へばその結果として、通車（北平奉天直通列車開通）通郵（滿洲北支間の郵便連絡——南京は滿洲との直通郵便を拒否してゐた）の協定が成立すると共に、滿支航空連絡も出來た。卽ち昨年十

一月十七日天津に成立した惠通航空公司はそれで、日支合辨資本金四百五十萬元のものである。その他昨年八月には、資本金八百萬元の日支合辨天津電業公司（發電二萬キロワット）が成立し長蘆鹽の對日輸出協定（昨年度輸出量七萬噸）が成立し、更に日本紡績が著るしく進出した。卽ち昨年は鐘紡が天津唐山工場を買收し、張家口に工場設置の準備を爲し、東洋紡は天津に敷地を買收し、大福公司が擴張を爲し、福島、富士、倉敷等の各紡績會社も敷地を買收した。之に依つて本年春には運轉紡機二十四萬七千錘、織機五千臺に上るであらうと豫想せられたのである。

然して之は、南京の北支の福祉を何等顧慮せず、實力者は力で叩き潰し、民衆は之を搾取するといふ行き方で、只管北支の奪取を工作した結果に外ならない。昭和十年秋の北支自治運動の如きはその大きな反動であつて、冀察政務委員會の成立は中央が此の反動を抑へた便法であつた。如上の日滿兩國の經濟的進出は總て冀察政權との協定である。

そこで南京は方策を改めてヂリ押し主義を取るに至つた。

第一は北支に對する經濟支配權の確立である。一九三五年春、南京政府は中國、交通兩銀行に增資を命じ、その增資株を悉く政府所有とし、銀行團から半强制的に借り上げた公債金を之に充當し、かくして此の二行をも中央銀行同樣の政府機關たらしめた。是等三銀行は政府銀行として、政府の特別の保護の下に特別の優越地位を占めることゝなつた爲めに、他の銀行の預金が續々此の三銀行に移動した。一般銀行が當時の中國銀行の總裁宋子文並に財政部長にして中央銀行の總裁たる孔祥熙に援助を乞ふと、彼等はそれ等銀行の支配權を收奪してから、之を援助する。同時に他方に於ては、幣制、稅制の改正を行ひ、收納の管理監督を行ひ、地方財政の實權を掌握し、地鈔、地方銀幣を回收し、中央銀行紙幣を發行して之を强制流通せしめて、地方銀行をして嫌でも中央に求援せざるを得なくしたかやうにして北平の金城銀行を始め多くの北支銀行は擧げて中央の支配下に入ることゝなつた。北平、天津等に於ける銀行の資本及び發券高を見ると上海系卽ち浙江財閥系、卽ち中央勢力が絕對優勢となつて了つたのである。

第二は政治的支配權の確立で、例へば冀察政務委員會に先づ下僚官吏として中央系の尖鋭分子を入れ、次で順次之を上層部へ擴大し、實質的に中央化し、冀察委員連の決定が多く命令の中途で握り潰され、或は書き換へられた。閻錫山、韓復榘等のところへは、藍衣社員或は市黨部のスパイを派遣し、彼等及びその下の要人連の行動を一々探らしめ、それを南京に報告せしめ、時には秘そかに銃殺し、或は檻禁したりした。之が爲め北支の要人連は手も足も出なくなり、日本人との來往を回避する樣になり、かくして中央の命令は下僚に依つてそのまゝ遂行されるといふ形を採るに至つた。

第三の軍事も同樣である。南京系の中級將校を各部隊に入らしめて漸次中央化した。同時に、共產軍が西北に逃れて北支を西北から脅威したのを利用し、中央軍を派遣して地方雜軍を監視せしめ、之亦逐次中央化することに成功した。

而して之が爲めに利用したのが、民族復興、支那統一、抗日等のスローガンであつた。之に反するものは總て非國民、賣國賊として非難されなければならなかつた。地方政權の人々も之には眞つ向から反對することが出來なかつたのである。

さうして南京が是等の工作を推進する有力なる道具としたのは各種の秘密團體、スパイ團體であつた。軍官系の藍衣社、憲兵團、C●C●團（國民黨の尖鋭分子）國民黨市黨部等が之であつた。梅津●何應欽協定は天津に居た抗日軍干學忠軍と共に之等の分子を北支五省外に追ひ拂つたのであるが、彼等は何時の間にか又ずる〳〵と潜り込んで來た。さうして抗日除奸團と云つた別動隊をも作つて、冀察政權の無力化、冀東政權の倒壞、北支各軍の抗日化、日本北支工作の全面的敗退を策したのである。

北支に起つた暴狀を見れば彼等の行動の成果は一目瞭然である。昨年の分を見ても

一月二日　太沽で大島洋行及び大西洋行を掠奪し國旗を侮辱した。

一月五日　將校以下數名が朝陽門で馮治安軍に射擊された。

五月廿九日　青島で小學生が支那學生に毆打された。

五月三十日　天津駐屯軍の部隊の乘つた軍用列車が天津附近で爆破された。

六月に入ると、大榮丸、茂登丸の拿捕、國旗凌辱事件、將校留置の豐台事件があり
七月にも、豐台事件外三つの暴行事件、
八月、九月にも、豐台に事件が起つた。
十月には山西省太原で和中公司掠奪事件が起つた。
而して本年に入つてからの是等各種事件は頻々として繼起し、南京の不快なる女性的工作は漸次烈しく且つ大規模になつて行つた。武裝部隊の各地襲擊の如きはその一例である（聖農園、大庄戸襲擊事件等これである）
今南京の對北支工作を詳記する遑はないが、大體如上の方策なり經路なりを取つて、彼の北支工作は著るしく進捗し、抗日意識の昂揚、南京統一工作各種の進展、軍備の充實等の背後の事實と共に本年に入つてからの北支不安は掩ふべくもなく、その特質は謂ふ迄もなく日本勢力の全面的敗退で、それは直ちに滿洲國に脅威の及ぶものであつた。換言すれば滿洲事變後に於ける對日對滿策を、今度は背後を鞏化し、組織的に計畫的實施して來たのである。彼等は滿洲事變前後の迷夢を醒さず、却つて民族決戰を方針として改めて出直して來たのである。
それ故、今次事變は、どうでも南京政府の此の民族決戰の意志を破碎し、その戰力を撃滅しなければ。彼の迷夢を醒すことは不可能である。

第四　南京政府の地位と列國

一　南京政府の立場

一九二五年七月廣東に成立してから、翌年開始された北伐に成功し、一九二八年四月南京に政府を再建した頃迄の國民黨中央政府、卽ち南京政府は、事實上蔣介石を總司令とすることに變りはなかつたが、恰も廣東、廣西、貴州等の西南派の政府であるかの觀を呈してゐた。所が現在の南京政府を見ると江浙派（浙江、江蘇兩省）の政府であるかの感が强い。同じ南方派であり乍ら廣東、廣西が容易に屈せず、屈しても尙反蔣を說く所以も萬更ない譯ではない。黨部、政府、軍部、財界等の要人中眼星い所を見ると浙江人が壓倒的に優勢であり、廣東派は汪兆銘、孫科等が微々として振はぬやうに著るしく衰微してゐる。

又南京政府は所謂浙江財閥と稱せられる上海財閥に據て立ち、或は之と全く一體の、唯一最大の財閥政權である。軍事のディクテーターと云ふよりも現在は總ての獨裁者である。蔣も今は上海財閥の最も有力なるメンバーの一人である。南京政府に於て經濟方面を代表する孔祥熙と宋子文は蔣と共に宋一家に緣を繫ぐ上海財閥の巨頭である。上海財閥は、張靜江、虞洽卿の二大御所に卒ゐらるゝものであつたが、今では新興の宋一家に依つて牛耳られてゐる。卽ち南京政府は新興支那ブルヂョアたる上海財閥の政府である。

更に、南京政府は他の一面に於ては軍閥である。それは支那が全體として尙未だ農民搾取の封建的進度に在る結果として當然であるが、各地に割據する地方土着軍閥と同樣に南京政府それ自體も著るしく軍閥的である。地方軍閥に對抗する爲めに已むを得ないかも知れないが、併しそれ自體も唯その最も强大なる一つであるとせざるを得ない。地方行政の主任者は軍事の有力者が多く地方を押へてゐるものも亦地方經濟の中央軍と稱する蔣の麾下部隊である。そしてそれ等の部隊は未だ國防軍としての形體內容を完整せず、素質に於

ても編成に於ても、その目的に於ても何十パーセントかは軍閥的である。

かくの如く南京政府は今日明かに支那中央政府ではあるが、尙彼の節制に服し切らぬ反對の勢力が地方に散在してゐる。昨今妥協の成立した共產政府、之も昨年秋以來中央に忠誠を誓つた西南派、山西の閻錫山、山東の韓復榘、蔣の沒落を窺ふ湖南の何健、北支冀察政權等々がそれであつた。是等は大體に於て中央軍の武力に壓倒せられ直接には中央に反抗する氣勢を示さぬが、南京政府の動向及び力量如何では何時その虛を窺ふかも知れぬものである。然も、それは今日漸くこゝまで地位を鞏固にしたのであるが、それまでには不斷の國內戰を續けて來たのである。

從つて南京政府はその成立の建前からして、支那から封建制と軍閥性を排除し對外的には半植民地的狀態から脫却しなければならなかつた。國內が分裂して居り、折あらば政府を倒さうとする反對の實勢力があつたが故に、彼等はスローガンの急速達成を望まざるを得なかつた。一度民衆に大きな題目を掲げた結果彼等は之を呼號し、實行しなければ民衆の支持を失ふ。恰も良し、張學良は自己地盤內の外國勢力たる日本を驅逐せんとした。學良が南京派の若い取卷きに煽動せられた事は否み得ない事實であつた。南京は先づ茲からうま〳〵と手をつけたのである。

然し乍ら彼等にはかゝる內政狀態を克服する爲めに重大なる國際關係を道具に使つた所に大きな無理があつたのである。之が誤ちの出發點であつた。次に事大思想と遠交近攻の傳統的原則に禍されて彼等は誤つて日本を擇んだのである。之れが第二の大いなる誤ちであつた。そしてこの誤ちには、彼等をして觀測を誤らしめた外力のあつた事を看過し得ない。

二　英國と米國

英國と米國とは同じ態度を以て、協調して支那に於ける日本勢力の退出を企圖した。巴里會議に於ける山東還付を中心とする日本壓迫の態度は今更ら詳記するまでもない。太平洋四國協約、海軍條約、支那に關する九國條約等々數へ來れば限りがない。その後に於け

る日米外交、日英外交は比々皆然りであつたと言へる。偶々支那がその排斥運動を英國に向けた時僅かに協力を求めたに過ぎなかつた。

而して滿洲事變に於ける彼等の態度は我國と共に支那を爭ふライヴァルとしてのそれであつた。

米國は滿洲事變當時の政府當局の失態以來、努めて愼重なる態度を持し、兩米大陸を中心とするモンロー主義に半ば歸つたかの自重的外交方針に終始し、日米間の經濟關係を考慮して稍友好的であつた。併し乍ら、英國と上海財閥に對する資本的支配を爭ふために却つて日本に好意的であつたこともあつたが、概して言へば日本經濟の支那進出を喜ばぬ立場に在つた。殊に華府會議以來の對支好意は在支商業利益を蔑らすべきものとして棄てなかつた。

英國は利害の外には何ものもない國だ。彼は大戰後獨逸領土の大いなる部分を領有して世界の大地主は更にその土地を加へた。それにも拘らず戰後經營の苦難から更に他の新市場たる支那に着目し、之を自己の半植民地化すべく東亞にその觸手を延し、他方に於ては經濟的鎖國主義を採つて、經濟的世界制覇に乘り出した。支那を得んが爲めに米國と爭ひ、日本と爭つて來た。長江沿岸に商權を得て居た彼は自然上海財閥との間に密接なる關係を生じ、遂には上海財閥を通じて南京を、延いて支那を金融的に支配するに至つたのである。上海財閥の有する資本中の民族資本は未だ微力で、結局その大きな部分を英、米特に英國資本に負ふてゐるのである。英國の在支權益の一大部分は南京政府と不可分となつたのである。かくして英國は南京政權の强大化と共に對支支配權を擴大することゝなり、陰に陽に南京の政策を支持後援することゝなつたのである。南京が抗日となれば英國も亦抗日を煽つた。南京が抗日武力を强化すれば英國之が指導に當つた。此の點は米國も同樣であつた。又在支英、米人は或は夫々米國の政府と直接關係はないかも知れぬが、在支英米人は新聞或は雜誌を通じ或は學校を通じて多年に亘つて抗日を煽つて來た。

かくの如くして、英、米が支那に利を求め、好意を寄せ更に積極的に支援して來た事實

は明かに支那の抗日に薪を添へ、支那をして日支相爭ふの際には强大英米の支援を得べしとの確信を抱かしむるに至り、愈々抗日を昂揚したのである。然も抗日は英米の經濟的支援と共に、南京の統一化、强化を所期の通りに進捗せしめることが出來たのである。

三　ソ聯と南京

支那共產黨は一九三二年の上海事件直後卽ち四月二十六日、瑞金で對日宣戰を宣言した。曰く、「……全中國勞農赤軍と廣汎なる被壓迫民衆とを指導し、民族革命戰を以て日本帝國主義を驅逐し云々」と云ふのであつた。

次で三四年になると民族武裝自衞運動を起して、對日作戰宣言を發表した。それは次の如き要目のものであつた。

（一）不抵抗主義の廢棄
（二）聯盟信賴の廢棄
（三）賣國賊親日政策の廢棄
（四）建設救國の廢棄
（五）敗北主義の廢棄

是等の思想の中心を爲すものは（一）重點を抗日に置き、（二）支那の抗日力を十分なりとするものであり、之に依つて中國共產黨の意圖する所は、國共合作、共產軍と中央軍との合流である。

茲で注意せねばならぬことは、中國共產軍の主張が單なる大衆動員から自信あり氣な武力戰主張へ變つて來たことである。吾々はそこにコミンテルンの魔手卽ちソ聯の意志を看取するのである。中國共產黨がコミンテルンの指令の下に動いてゐるものであることは周知の事實である。然るにコミンテルンとソ聯とは全く一物の兩面であるに過ぎぬ。されば こそ一九三四年に至つてかくの如く昂然たる武力戰を主張するに至つたのである。蓋し一九三四年はソ聯の第二次五年計畫がいゝ加減進捗して、ヴオロシーロフ國防人民委員トハ

チエフスキー同次長が口を揃へてその軍備の躍進を誇示し、どこの陸軍でも鎧袖一觸であるかの樣に主張し始め、滿ソ國境などに於ても、國境紛爭が惡質化し始めた時であつた。

更にその作戰計畫なるものを見ると、

（一）陸海空軍を總動員する。

（二）人民全體を總動員して民衆義勇軍を作る。全人民を武裝する。

（三）日本以外の一切の敵と妥協聯合する。

（四）軍費の解決は、日本在支財産の沒收、賣國賊の財産沒收、國庫收入一切の充用、財産累進所得稅、內外からの寄附に依る。

と云ふのである。

卽ち昨今南京政府が國民に說き、自分も何時か之を信ずるに至つた日本に負けぬとする思想と、抗日に重點を置き他の一切と共妥せんとする思想とは中國共產黨の思想であり、之等共產黨の宣言が常に先行してゐた事實に依つて寧ろ共產派が原動力であつた事を知るのである。同時に共產黨は國民黨との合流に依つて國民黨を共產化せんとするもので、是は明かにコミンテルンの作戰であり、ソ聯の企圖あると言はねばならぬ。ソ聯と支那抗日戰との關係はかくして不可分である。

南京駐在ソ聯大使が蔣介石に助言を與へたことは英國のそれの比でないことは多くの人の推察する所であるが、それは次の二つであると云へる。

第一は支那に對する　神的の援助であり、第二は武器、彈藥等の物的援助である。

支那の如く他力本願の國に取つて、ソ聯の一言は恐らく大きな影響を與へたであらう。而して武器彈藥の援助は更に大きな望みを與へたであらう。一九三四、五年の頃支那は日ソ間の緊迫せる現狀に鑑み、兩者開戰の場合、何れの側に立つべきかを久しく考慮して居た。然るにその後に於ける支那は明かにソ聯を擇んだのである。蓋し恐らくはソ聯軍備の强大化、特に空軍の優秀、背後軍事工業の强化等が支那をして彼れに傾かしめたものであらう。それにしても支那はソ聯の使嗾に乘つて抗日一路を盲進し來り、遂に今日の如き事

態を迫出せしめたのである

第五　極東永久戰の構へ

一、事變進展の新段階

昨年七月我が三軍の大陸出動以來早くも九閲月、その間、三嘆すべき皇軍の疾風的進出と共に事變は急速に重大な展開を遂げたのである。交戰地域は北支の一局部から全北支に擴大し、更に中支に飛び移つて一擧抗日國民主義支那の牙城南京攻略となり、更に海軍の攻擊は全支沿岸の要地を殘す所なく、空軍は國民政府退避豫定の要市及び奥地の各種要衝を隈なく爆擊するに至つた。かくして尠くとも爆擊を免かれる所が支那には有り得ないことゝなつたのである。即ち我が三軍の威力は全支を完全に制壓し得るに至つたのである。

全支に亘る交戰の狀況が今後どんな方向を辿るかは、不擴大局地解決の方針であつた北

支事件が玆まで展開して來た經緯に見ても、今日之を輕躁に豫斷することは出來ぬ。然しそこに二つの豫想があり得る。一は日本が作戰準備を新たにして國民政府の殘骸を廣東、漢口、南昌、衡州等から更に僻陲の地に追ひ捲つてその餘喘を斷つ途であり、他は大體現在の線を以て一先づ占領地域の整頓工作時代に入る途である。而して事變が今後孰れの途へ轉廻して行くか、日本がその何れを撰ぶかは、一に繫つて抗日支那の出樣如何に在ると云はねばならぬ。

が然し、玆に瞭かなことは、その何れの途を取るにせよ、我が日本の擔はなければならぬ運命は唯一つ、永久戰の構へを確立しなければならぬことゝこれである。蓋し、抗日政權をとことんまで追剿するとすれば勢ひ抗日軍の死力的反噬に會することは勿論、長遠廣汎な作戰準備を更に要するであらう。加之、その爲めには重大なる國際的紛糾を釀すことを最惡の場合として想定しなければならぬ。我が作戰力を支那南西の奥地に展開する虚に乘じてソ聯の飛び出して來る一つの可能性と、南支に蔣政權を追詰める結果生ずることある

べき英國との破綻是れである。之は我が國力を擧げて急速に傾盡すべき場合である。又現時の態勢に於て新興支那の興隆に主力を集注するとしても、そのために第一經濟動員を必要とし、第二地上に於ける緩慢乍ら廣汎な武力戰を繼續し、空中に於ては恐らく斷續する攻防戰を繰返へさねばならぬであらう。卽ち相當部隊の永久駐兵、空軍の絕へざる活動が要求されるのである。

その何れの場合に進むにしても、決戰的一大戰爭に驀進するか、或は持久消耗戰を長期に戰ふかの相違はあるが、更に〳〵我々の決意を新たにすべき一新段階に入らんとしつゝあることは明らかである。而して今、抗日陣營に於ける動局を大觀的に言へば、沒落か反省かの岐路に差しかゝつてゐるものであるといふことが出來る。この事實は前記二途の中後者に進むべき公算が多いといふことである。

次に少しくその事實を明かにしよう。

二、抗日支那の分解

支那の抗日戰力が意外に强靱であつたことは否定されぬ。特に中支戰線に集結された中央軍を主體とする部分は豫想以上に頑强であつた樣だ。今次に於ける支那戰線が一九三一・二年當時とは到底比較にならぬ强力なものであることは戰前夙に豫想されてゐたのである。それ故、今次交戰が一擧手一投足の勞を以て終熄し得るものであるとは何人も考へてゐなかつたのである。然し乍らかほどまで强靱なる抵抗が續けられるであらうことは必ずしも想定されてゐなかつたのではなかつたが、多くの見解ではなかつた樣である。

然らば抗日支那のかくの如き頑强さはどこから來たか？　各戰線に共通なる理由の主たるものを擧げれば凡そ次の如きものであらう。

第一、國防工事の完成と普遍化
第二、編成、裝備、訓練の改善
第三、抗日侮日憎日敎育の徹底化
第四、兵力の大數と交戰地域の尨大

第五、統一工作の成功

第六、英・ソ兩國の支援

右の中、第一、第二は直接の所謂軍備の充實改善の主たる部分であり、第三は軍事教育の核心を爲したものであり、更に第四は支那の國防地理が有つ自然的好條件である。併し支那をして今日の如く戰はしめた最大の理由は第五と第六とであつたのだ。（但し、第六に就ては支那が與へ得る物を豐富に持つてゐるといふことがその大きな理由を爲してゐることに注意する。）

蔣の統一工作が完成されたものでないことは一般に認められてゐた。就中、各地に永く割據してゐた地方勢力の統合が果して確實に各派を膠着せしめたか否かの疑惧がその大きな理由と認められてゐたのである。余漢謀の寢返りに依つて蔣派に屈服した廣東、廣西の西南派、蔣派の武力に威壓された湖南の何鍵、共產軍の脅威を囮に使はれて蔣政權に抑へられた四川各將領及び山西の閻錫山等の各地方勢力、抗日を名として複雜な經緯から合流合作した共產派、更に、C・C・團と藍衣社、武人派と黨部、等々、所謂統一聯合抗日戰線は極めて多彩な構成を取つてゐた。是等の諸派が抗日戰線、國民政府の難局に立つて必ず破綻を生ずるであらうことは何人も疑はぬところであつたのである。

それが上海攻略の後にも、南京攻略の後にも、容易に決定的な分解作用を起さず抗日戰爭を續けて來た事は、たしかに統一工作の成功と見なければならぬ。そしてそれは實に英國とソ聯の强力な精神的、物質的援助によるものであると云はなければならぬ。

然るに、本年に入るや抗日支那の動搖が明らかに外部に映り始め、遂に先づ共產派の分離が事實となつて現はれるに至つたのである。北支で皇軍に驅り立てられてゐる雜軍は窮鼠的抵抗を續けてはゐるが、その胸中は既に國民政府から離反して北京の新政權に抱擁されんことを願つてゐる。廣東にクーデターが起つた事も報ぜられた。蔣派の武力が要所々々を押へてゐる爲めに反蔣派の大同團結が困難であり未だ大事に至らないが、分裂の危機は潛んでゐる。四川將領も國民政府が四川に退避せんとするのを拒むでゐると傳へられる

しかし、是等は依然として英國の財力と智力とそして大きな背景とを後楯とする蔣勢力に依つて抑壓されてゐる。國民黨系と軍官系即ち文人派と武人派との衝突も未だ表面化し得ないでゐる。

總てこれ英國の力であると云ふことが出來るが、反之、共產派は明白にその方向を轉換した。西安事變を契機として共產派の周恩來が先づ國府に入り込み、國共兩者の合作を策すると共に抗日戰線の實際運動に於ても、共產派はその人と共に戰術、思想を國民戰線內に織交ぜ、日支事變の勃發と同時に、完全に合流して了つたのである。周恩來、毛澤東等の巨頭が國府の要部に地位を占め、朱德等の率ゐる共產軍は八路軍と改稱して全く中央軍としての取扱ひを受け、西北戰線或は隴海線方面に動いてゐた。然るに國民政府の斷末魔が近づくと見るや、俄然その本性を現はして共產派に依る國民政府の乘つ取りを策した。國民政府を共產派に依つて指導せんとする提案を爲すに至つたのである。之が爲め、英國の支持する蔣派と勢ひ正面衝突を爲すに至り、遂に共產派が獨自の行動を取らんとすることゝなつたのである。

三、ソ聯本性を露呈す

蓋し抗日支那を構成せしめてゐた背景の勢力が、玆に利害の衝突を來すに至つたからである。抗日に依つて日本勢力の支那敎化を排除しやうといふ點に就てはソ聯も英國も一致してゐるが、抗日の內容たる支那を如何に取扱ふかの點に至るとソ・英は完全に背馳した目的を持つてゐた。卽ち英國は英國資本に依つて蔣介石政權を金縛りにし、その蔣政權の勢力を伸長せしめることに依つて自己の支那支配權を確立し樣としてゐたに反して、ソ聯はそのイデオロギーを以て支那全土の赤化を企圖してゐたのである。

ソ聯の支那赤化を分析すると次の如き段の希望を抱いてゐたのである。

第一、全支をソヴエート化し、ソ聯邦內に包攝する

第二、次善として國民政府內に有力な地步を占め、國民黨內に共產派の勢力を扶植し、

支那全土に赤化宣傳の大きな機會を掴むと共に、支那西北赤化――ソ聯化の具體的基礎として、西北に鐵道その他の基本的な利權を獲得する

第三、最惡の場合として、國民政府敗戰の廢墟に自力單獨でソヴェートを建設せんとする

現在既に、第一は全く望みを絶たねばならぬ。第二も亦英國との利害の衝突に依つて不可能となつた。そこで第三と類似の場合を想定して、可能なる範域の赤化を策するに至つたのである。共產派の單獨行動はその爲めのものであり、その直接の目的は西北諸省並に四川省等を共產黨の勢力內に抱き込まうとするものである。然して二月十四日スターリンが世界赤化政策に還元することを聲明し、第三インターの書記長デイミトロフがコミンテルンと赤軍との緊密なる提携に依つて行はれなければならぬことを主張したのは實にかゝる支那共產派の動向を指示したものであつた。

現在未だ共通目標たる日本軍との交戰が行はれてゐる結果として、國共二派が鬪爭するところまでは行つてゐない。共產軍も西北に日本軍と戰ひ、ソ聯空軍も依然支那空軍として日本空軍に叩かれてゐる。然しその行動の內容に至ると、それは從來のそれとは全く異り、國民政府支那の爲めに戰ふのではなくして、ソ聯自身のために戰ふのである。かくして、西北支那はいまや全く國民政府とは別個の勢力として北支包圍陣を形成するに至つたのである。

四、英國轉向の眞相

英國外相の更迭は英國外交の轉向たることは言を俟たぬ。イーデンの退任は理想主義、聯盟主義の後退であり、英、米、佛、ソを主力として國際聯盟諸國の集團力を以てする防共陣の大包圍政策の廢棄である。そしてハリファックスの外相新任は、實際にはチェンバレン首相の勝利であつて、その實質は、現實主義の勝利、國際聯盟萬能主義の拋棄であり防共陣に對する直接の突擊――防共陣營の切崩しである。

英國の戰略轉換は一面に於ては明かに歴史の必然に對する屈服である。防共陣の正當を是認したものである。持たざる國々の主張を容れたものである。ソ聯と密接に連絡ありと公言したイーデンが退いて、ドイツに植民地還附の意あることを言明したハリファックスが登場したことはその證左である。然し乍らそれは英國が現狀維持の立場を固執することの非を悟つて之を全面的に拋棄する方向に進まんとするものではなく、一時、且つ局部的に現狀維持政策を讓歩することが現狀維持の趣意を通す最も賢明なる策なることを見て取つたからに外ならぬ。イーデンの如く現狀打破派と確然對立することが却て現狀維持を爲す所以に非ず、卽ち英國の利益に非ずと見たるが故に外ならぬ。

英國がドイツに若干の植民地を提供するであらうことは想察される所であるが、英國はそれに依つてドイツの進擊方向を東方ソ聯の領域に確定せしめ、英國に對する多少の不安を一掃せんとするのである。又英國はイタリアと地中海問題に就て協定を遂げ樣としてゐる。エチオピア占領の承認、地中海に於けるイタリアの新地位の承認、之をイタリアに與へることに位つて英國は地中海に於ける英國の地位、安全をイタリアに承認せしめ樣と云ふのである。イタリアのエチオピア攻略に際して、敢然之に反爭したイーデン外交は地中海に於ける英國の安全性に對して大いなる脅威を受けた。そこで地中海に代つて英國と諸領土とを結ぶ通路をアフリカ迂廻航路に求めると共に、對立狀態そのものを解消せんが爲めにイタリアと協定し樣としてゐるのである。それは既に何うにも手の附け樣のない既成事實を承認することに依つて歐洲、特に地中海に於ける安全を保障せんとするものである。

然らば英國のかゝる讓歩は何を意味するものであるか？　他なし、極東作戰遂行のための保障運動である。卽ちドイツに諒解を與へて之を藥籠中のものと爲し、イタリアに好意を與へてその鋒先を挫き、かくすることに依つて、今日まで著るしく抗英的であつた防共ブロックを、親英色に塗り替へ樣といふのである。そして望むらくは獨伊樞軸を分斷せんとするのである。然らば英國は歐洲に於て何等後顧の憂なきに至る譯である。卽ちその餘

力を擧げて何處に轉用せんとするのであらうか。それは謂ふまでもなく極東である。

日支事變に對して英國が終始採つて來た態度は洵に眼に餘るものがあつたが、これは決して一時の出來心ではない。是れ皆日、米と必爭の一大市場支那を放すまいとする最後の努力であつたのだ。そこで獨伊を掌握することは、英米の協同武力による日本威壓に失敗したその穴を、獨伊を日本から引離すことに依つて補はんとする目的である。そして英國は、せめて長江以南の地盤だけでも死守しやうとするであらう。そのため蔣政權の壞滅を何等かの方策を講じて極力阻止しやうとするであらう。若し英國が極東に於て妥協的態度に出でるとすれば、それは元も子も失くす代りに、その一角を確保せんがためのものであることを篤と記憶せねばならぬ。蓋し、一角を確保することは將來再起の據點たらしめんとするがためのものだからである。

五、新支那の永久戰體制

以上の如くして抗日支那は二分された。共產支那と英國支那とが之れである。然して共產支那がソ聯と一體となつて蒙古から西北邊境に永久戰を挑むことは明白である。又英國支那が今後日本及び新支那に對してどんな態度に出るかは尙豫斷を許さぬものがあるとしても、それが現狀を以て甘んずるものでないことは確言し得る。即ち先づ新支那に對してその成育を凡ゆる方面から妨害するであらう。治安の攪亂、要人に對する個人的な攻擊、思想宣傳、經濟鬪爭等々、而して所謂ゲリラ戰を以て臨み、眞の意味での長期消耗戰を行はんとするであらう。英國が日本にどんな言質を與へ、約束をするとしても英國が支那の援助を熄めることはないであらう。

かくして新支那と之を大成せしめなければならぬ日本とは、玆に新たなる消耗戰を持久しなければならぬ。その爲めには

第一、域內の肅正工作を長期に亘つて持續しなければならぬ。

第二、共產支那、英國支那と對立するその境邊に强固な武裝地帶を設定しなければなら

ぬ。以上二つの目的の爲めに强大な武力を新支那域内に維持しなければならぬ。

第三、右の武裝地帶に近く空軍根據地を設定し、隨時敵根據地を爆擊しなければならぬ。

第四、出來るならば沿岸航行の永久封鎖を爲すことが必要である。

第五、かくして新支那の永久戰並に經濟戰を遂行するために、日本も亦永久戰體制を採らねばならぬ。

然して新支那の大乘的且つ徹底的な經濟的、政治的並に文化的開發をしなければならぬが、若し國府の殘骸が何等の形に於て殘らねばならぬとするならば、その復興に對して備へなければならぬ。それを復興せしむるものに對して備へなければならぬ。然も、今や、支那現地の事態は將にかゝる長期消耗戰を必至ならしめんとしつゝあるのである。新段階の狀勢は日本の將來に益々重大な、然し益々希望の大いなる運命を負托せんとするものであるといはねばならぬ。

結　論

今日まで醒めぬ抗日支那の迷夢が今後急速に醒め樣とは思はれぬ。されば、支那は依然としてソ聯が支那の側に立つて日本と戰はんことを欲してゐる。然し重ねて言ふ。ソ聯は唯支那の赤化をこそ願へ、抗日支那が日本を謝まらせる程の强大となつて赤化の機會を失ふことを欲するものではなく、又、支那が支那の獨自の存立方式で繁榮することを欲しては居らぬ。ソ聯は寧ろそれ位ならば支那が七花八裂の狀態に崩壞することを冀ふものである。

支那は又英國が起つて日本を强壓することを望むであらう。然し乍ら英國は未だ容易に起たぬ。歐洲に於ける背後の保障が確立せぬ内は起てぬ。軍備の大擴張が極東に於て日本を制するに足るところまで來なければ出はせぬ。然もそれは尙年を要するであらう。さうして英國が起つて日本を抑へるとするも、それは支那を植民地化して搾取するに過ぎぬで

あらう。印度を見よ。彼等印度大衆は如何に英國の壓制下に喘いでゐるか。英國が支那をその盟邦として好遇することを期待し得るであらうか。アラビアを見よ。彼等が如何に虐殺され、盲爆され、酷使されてゐるか。英國の利益の外に彼が何の大乘的平和を望んでゐるであらうか。

支那はまだ日本と爭はんとしてゐる。物の勢ひで已むを得ないかも知れぬ。然し日本は支那にどこまでも暴壓を加へんとするものであらうか。滿洲國を見よ。之は無謀なる日本襲擊に對して防禦した結果に過ぎぬ。日本は長城を守らうとした。支那は長城を奪はうとした。かくして北支への不可避なる進出があつた。日本は北支に共榮の途を求め樣とした。然るに支那は北支に指一本觸ることを拒否し、剩つさへ滿洲をさへ覆へさうとした。かくして日支事變を殊更に誘發した。然して滿洲國を見よ。印度と比較せよ。アラビアと對比せよ。ソ聯領内の殺人政治と思ひ比べて見よ。

日本は現在支那との眞の意味の共存共榮、皇道と王道とに基く有無相通の原則に基いて東亞の繁榮と平和とを求めてゐるに過ぎぬ。新支那に布かんとする新民主義の思想は即ち皇道であり王道である。支那の赤化も植民地化も望んで居らぬ。徒らなる挑戰、挑發さへなければ、日支和親の大道は直ちに開かれるのである。歐洲との交通を拒否すべしといふのではない。アジアの精神に還れといふのである。英國の奴隷となつて日本と垣に鬩ぐ愚を罷めよといふのである。ソ聯の囚人となつて支那を失ひ、アジアを荒廢せしめることを熄めよといふのである。（本項昭和十三年三月五日追稿）（完）

本書は時局並に日支の將來に對する認識を深める爲め弘く全國民に頒布致すものにて購讀希望者には無料にて贈呈す、尙ほ各種團體の申込には相當部數を呈す（但し送料を要す）

昭和十二年九月十八日印刷
昭和十二年九月廿三日發行
昭和十三年三月十六日改訂增補

支那事變と吾等の覺悟
（非賣品）

著者　東京市麹町區平河町一ノ二
東邦國策同志會

發行者　東京市大森區北千束六三三番地
高田春造

印刷者　東京市芝區田村町四丁目十四番地
石橋萬次

印刷所　東京市芝區田村町四丁目十四番地
石橋印刷所

不許複製

發行所　東京市麹町區平河町一ノ二
東邦國策同志會
電話九段（33）四七八〇番
振替東京一三九二三〇番

終